

2011 年度 私立大学図書館協会 海外認定研修報告書

藤女子大学図書館 川邊蓉子

調査・研究テーマ：「セネガルの図書館事情調査」

目次

1.はじめに	2
2.セネガルの概要	2
3. Keur Sabassi Tiam	3
サバシー・チャム村小学校図書館：2010年12月21日火曜日訪問	
4. Bibliotheque Municipale de Sokone	4
ソコン市図書館：2010年12月22日水曜日訪問	
5. Bibliotheque Université Cheikh Anta Diop de Dakar	5
シェイク・アンタ・ジョップ大学図書館：2010年12月28日火曜日訪問	
6.終わりに	9
7.参考文献	10

1. はじめに

セネガルへは、JICA の活動に従事している友人を訪問することとサバシー・チャム村小学校図書館でボランティアをする為に訪れるのが当初の目的だった。しかし、ボランティア活動の事前準備にセネガルの図書館について調べてみたが、得られる情報が少なかった。このことからセネガルの図書館事情についても興味がわき、現地調査をすることにした。旅程の中で私が訪問した図書館は、ボランティア活動先であるサバシー・チャム村小学校図書館、ソコン市図書館、首都ダカールにあるシェイク・アンタ・ジョップ大学図書館である。

2. セネガルの概要

アフリカ大陸の中でも日本からの観光客も多く、メディアから得られる情報も多いようなエジプトや南アフリカとは違い、セネガルに関するイメージを漠然とでも持っている人は少ないのかもしれない。

セネガルは西アフリカの西端に位置する共和国で、日本の約半分の国土となっている。アフリカの中でも都市化の進んだ国の一つであり、人口は 1,240 万人（2010 年時点）で、総人口の 35% をウォロフ族が占める。1960 年 4 月に独立するまでは、フランス占領下だったこともあり公用語はフランス語であるが、ウォロフ語も共通語として広く話されている。住民の 87.6% がイスラム教徒で、首都はパリダカで有名なダカールである^{1) 2)}。

ダカール市内は、ヨーロッパや中国企業が進出している為高層ビルが立ち並び、ヨーロッパから来た商品も多く目につく。私の滞在したホテルの近くにケーキやジェラードを販売している店があったが、いつも店内は混んでおり、商品はショーケースの中に綺麗に陳列されていた。アフリカというと物価の安いイメージがあるかと思うが、ジェラードのような嗜好品は日本の価格とほぼ変わらない。



ダカール市内

一方、ダカールから車で数時間離れると街並みは一変する。5 時間程離れたソコン市では、ジェラードなどのアイスはなく、代わりにピサップ（ハイビスカスジュース）を凍らせたものをアイスとして食べていた。道路も舗装されているのはメインストリートのみで、3 階建て以上の建物は無い。このように、首都と周辺都市とでは経済発展に大きな差があるが、停電や断水に関しては同様に頻繁に起こることである。



周辺都市のメインストリート

さらに、ソコン市から 8 キロ程離れたところにあ

るサバシー・チャム村では、電気や水道も通っておらず、懐中電灯や井戸水で生活している。懐中電灯が村では主流だが、学校や一部の民家ではソーラーパネルを設置しているところもあるようだ。また、村の中を歩くと鍛冶をする人や藁で塀を作っている親子の姿が見られた。ちなみに、ソコン市まではセットプラスという7人乗りのタクシーに乗って移動をしたが、ダカールを離れるにつれて道路事情は悪化していった。砂の上に舗装道路を作っているのが年月が経つと道路に穴が空いてしまう。その為、穴を避けながら道路脇や対向車線側も走行する。セットプラスはセネガルではポピュラーな乗り物だが乗客が7人揃うまでは発車しない為、出発まで3~4時間待つこともある。また、途中で乗客があれば7人乗っていても、それ以上の人数を乗せる。クーラーなどはもちろんなく、クッション性ゼロの座席で、すし詰め状態になりつつの移動だが、私の場合は運よく30分程度で出発したので幸先の良いスタートとなった。

3. Keur Sabassi Tiam

サバシー・チャム村小学校は2000年に設立された。設立当初は藁で造られていた校舎も、2002年にはコンクリート製に建て替えられ、現在約100人の児童が在籍している。教室は2つあり、それぞれ100㎡程度の広さがある。学校図書館はセネガルへ教育支援を行っているボランティア団体が建設費用を負担して建てられた。現在の蔵書数は数えられる程度だが、シェイク・アンタ・ジョップ大学図書館勤務のM.Poleの協力により選書・発注作業を進めており、今後増やしていく予定である。図書館内は、教室同様の広さで壁際には木製書架が設置されていた。しかし、館内には虫が巣を作っており図書を保管出来ない状況にあった。虫が図書とブッカーの間に入り込んでしまいうらしく、学校で唯一施錠の出来る校長室のロッカーに別置されていた。



サバシー・チャム村小学校図書館外観

私は、図書館所蔵用にボランティア団体より預かった絵本を小学校教員 M.Dione に渡し、日本から送られたカード目録や貸出カードの利用方法、装備の仕方を伝えた。装備等作業は屋外で行ったが、砂埃が舞うので糊をつけてもすぐに砂がついてしまうなど、現地で作業を試してみても見えてくる状況もあった。今後、小学校とボランティア団体で図書館を作り上げて行く中での新たな問題も見えたが、一緒に作業をした M.Dione は貸出の方法や管理の仕方がわかって良かったと言ってくれ、微力ではあるが図書館の進展に携われたことを嬉しく感じた。



ボランティア風景

この図書館支援活動は、2002年より東京にある

NGO「バオバブの会」によって開始された。活動に前向きだった前校長のもと始まったが、2009年に現在の校長に変わり、活動にも変化が訪れた。現在の校長は、図書の必要性を重視している方ではなかった。教員の中には、活動に積極的な方もいるので否定的な意見ばかりではないが、読書に対するセネガル人の意識についても、残りの日程の中で調査することにした。

友人の知り合いで赤十字に勤務している M.Cissé に話を伺った際、学校でのことを話してくれた。学校では授業が終わるとその日学んだことを先生が板書し、子ども達はその内容をノートに書いて暗記するそうだ。(次の日、先生がランダムに子どもに質問し、答えられなければ叩かれる。)しかし、子ども達は聞いた内容は覚えられるが、文字を暗記するのは苦手だと言う。M.Cissé 自身も本を読むことに慣れていないそうだが、これはセネガルが口承文化であることも一要因として考えられるのかもしれない。セネガルの歴史を伝承するグリオ³⁾が現在も存在するように、人に伝えるということは書き記すのではなく、話すことで残ってきた。滞在中に口承文化であることを感じた一つとして、バス停の存在がある。セネガルにはバス停や時刻表がなく、誰かに聞いて乗り場を教えてもらう。「読む」ことより「聞く」ことが多い日常の中で、人々は文字との距離を感じてしまうものなのか。今後もセネガルへの教育支援活動に携わっていく中で、調査していければと思う。

4. Bibliotheque Municipale de Sokone

ソコン市図書館へは、事前に図書館があるのか情報を得られないままソコン市に向かったが、友人と町を歩いている時に見つけたので訪問することにした。図書館に入ると誰もいなかったが、しばらくするとスタッフの Mme.Camara が戻ってきたので話を伺うことが出来た。

ソコン市図書館は、1995～1996年に前市長である Abdoulaye Mbaye によって設立され、フランスのボランティア団体が図書を寄贈したことから始まった。現在は、ベルギーのボランティア団体が支援している。ボランティア団体とのやり取りは、年に一度図書館が必要なものを伝え、物資を送ってもらっている。物資はヨーロッパで調達される為、図書館に所蔵されている図書は全てフランス語だった。現地の言葉で書かれた図書があれば子ども達も図書館を利用してくれることから、Mme.Camara はウォロフ語の図書の購入もボランティア団体に希望しているとのことだった。



ソコン市図書館外観

利用者は中学生から大人までが多く、年間利用料を支払い利用している。利用料は、子どもであれば 200 FCFA⁴⁾、中高生は 500 FCFA、大人は 1000 FCFA となっている。貸出期間は 2～3 週間で、貸出・返却記録をつけて管理していた。

図書館は 100 m²程度の広さで、壁際には 6 段架の木製書架が並んでいた。使用されているのは 4 段程度であったが、おそらく 2,000 冊は配架されていただろう。その他、図書館の隅にある机の上には雑多に図書が積まれていた。机の横にはパソコンも置かれていたが、以前 4 台あったパソコンも、2 台が紛失し、1 台は故障したようで、現在使用出来るのは 1 台のみとのことだった。巨大な薄型テレビのような家電製品も部屋の隅に置いてあったが、パソコンと同様に使われていないとのことだった。現在勤務しているスタッフは、資料の修理や管理方法がわからない為、痛んだ資料は燃やして処分していた。



ソコン市図書館内

ソコン市図書館で話を伺い、図書館は利用されているものの、ウォロフ語の図書がない、管理の方法がわからない等の問題があり、ボランティア団体と現地とのやり取りや支援のあり方について考えさせられた。セネガルは湿度が高い為木製書架は大きく歪み、図書も埃にまみれていた。ヨーロッパや日本のような資料や施設の管理は出来ていないが、大切なのは先進国の図書館環境をそのまま導入するのではなく、現地の環境にあわせた図書館を作ることだと感じる。全ての条件が揃っているから“良い図書館”ではなく、現地なりのペースで“ソコン市図書館”を作り、少しずつ利用者を増やして欲しいと感じた。これはサバシー・チャム村小学校図書館にも言えることで、これから活動していく上での先行例として Mme.Camara に話を伺うことが出来たのは貴重な経験であった。

5. Université Cheikh Anta Diop de Dakar

シェイク・アンタ・ジョップ大学（以下 UCAD）は、セネガルがフランスから独立する前の 1957 年 2 月 24 日に創設された。1987 年 3 月 30 日に、名称を「ダカール大学」からセネガルの歴史家であり人類学者でもあるシェイク・アンタ・ジョップの功績を称え UCAD に変え、現在は 6 学部 10 研究所 5 付属機関を擁する総合大学である。創設当時、1,018 人しかいなかった学生数も 2006 年には 60,000 人まで増え、現在も増え続けているようだ。学生の多くが地方出身の為 UCAD 内の寮を希望するが、部屋数は 5,000 しかないようで大学付近に部屋を借りて大学に通っている。学部は文学部、医学部、理学部、経済学部、法学部、教育学部があり、研究所としてはフランス語、応用言語学、釣りや養殖などがある。EBAD（図書館養成課程）は、付属機関に含まれている⁵⁾。

5-1. Bibliotheque Université Cheikh Anta Diop de Dakar

UCAD 図書館の訪問は、大学で言語学を教えている M.Ndiaye の紹介により実現した。M.Ndiaye が図書館長を紹介して下さり、図書館スタッフの案内のもと中央図書館、フランス文学部図書室、EBAD 図書室を見学することが出来た。UCAD 図書館は、サハラ南部フ

ランス語圏の国の中で最も歴史が古く、最大の規模を誇る。UCAD において図書館の象徴とされる古代バオバブの木は、学術資料が研究において重要な役割を果たすという意味も含め大学の中心部に植えられている。

2009 年度の UCAD 図書館報告書によると、2008~2009 年の図書館の利用登録者数は 19,302 人、入館者数は 1,383,837 人、貸出冊数は 118,794 冊で、予算は 185,191,060FCFA とのことだった。蔵書数については、残念ながら記載を確認することが出来なかった⁶⁷⁾。

5-2. 中央図書館

中央図書館はカナダの支援により改修・増築をしており、書庫、閲覧スペースの他に講堂や中庭もある広々とした空間となっていた。具体的な敷地面積等は不明だが、1 階正面玄関を通ると入退館ゲートがあり、ゲート奥には円形カウンターが設置されている。カウンターの左右には、展示スペースと OPAC 検索スペースがある。カウンターを抜けると中央に大きなアトリウムと中庭があり、その左右に開架書庫と閲覧スペースが延びている。各フロアの面積は目算だが 1,500 m²はありそうだった。右側のフロアには歴史・経済・言語等の分野があり、左側には物理・薬学関係の資料が置かれている。2 階には 50 人収容可能な講堂があり、3 階には各 500 m²程度のオーディオルームと新聞・雑誌フロアがある。その他、5 階建ての開架書庫や図書館裏には食堂もある。



UCAD 中央図書館

図書館の利用は、年間 10,000FCFA を支払えばダカール市民も利用出来る。大学所属者は身分によって利用料が異なり、学部生は 500FCFA、マスターは 5,000FCFA、教授・研究生・ドクターは 2,500FCFA かかり、申請にはその他に学生証や職業カード、申込書、写真が必要になる。貸出期間は、学部生とマスターは 15 日間 2 冊まで、教授・研究生・ドクター、その他の利用者は 15 日間 5 冊までで、延滞すると 1 日につき 500 FCFA 支払わなければならない。更新は身分に関わらず一回までとなっている。図書館長 M.Sambe にお会いする為、館長室前で待っていた際に、利用証発行の為に順番待ちをしている学生を数名見た。館内を案内してくれた M.Mané の話では、中央図書館の一日来館者数は約 6,600 人いるそうなので、利用証更新手続きの為に利用者が日々こうして順番待ちをしているのかもしれない。

中央図書館の開館時間は、1 月~6 月は平日 9 時~20 時/土曜日 9 時~18 時、7 月~11 月は月曜日 12 時~22 時/火曜日~金曜日 8 時~22 時/土曜日 8 時 30 分~18 時と時期により異なる。閉館は、日祝日、8 月、月曜日の午前中となっている。月曜日は書架整齊の為に休館にしており、チーフ以外のスタッフ全員で書架整齊を行っている。その間、図書館は立入禁止となる。



館内風景

図書館には、冬期休暇期間中にも関わらず勉強している多くの学生の姿があった。広々としたフロアの中心にはカウンターがあり、常時 3 人のスタッフが配置されている。これは、レファレンスの為と本を破らないかどうか監視の為にいるようだ。現在は、カウンター内にコピー機が設置されており、学生からの依頼があれば複写作業をスタッフが代行しているが、設置前は本を破いて持って帰ってしまう学生もいた。現在も起こっている事のようなが、発見し

た場合は警察を呼び対処している。破損本の発見は事後になることが多いが、破損本等補修作業を毎週月曜日に修理課のスタッフが行っている。破損本の多さとしては、フランス文学、英文学、スペイン文学の順にあるようだ。フロアの一部には、グループ学習室が設置されており、ガラスで仕切られた 8 つの部屋の中には黒板と机・椅子がある。使用の際は前日までの予約が必要で、利用時間も 8 時～12 時 / 12 時～16 時までと決められている。

図書館 3 階のオーディオルームと新聞・雑誌フロアは、マスター 2 年生以上の利用に限られている。これらの部屋はエアコンが完備され、閲覧スペースにはソファもあり快適な環境となっている。3 階以外のフロアは空調が効いておらず、閉架書庫内も湿度・温度管理を常に行っているわけではない。ちなみに、3 階の利用はマスター 2 年生以上であっても年間 10,000 FCFA の使用料を支払わないといけない。



3 階オーディオルーム

5-3. システム導入

中央図書館がカード目録から OPAC へ移行したのは 2002 年で、それまでは図書館内への利用者の立入は禁止しており出納式だった。OPAC と入退館ゲート設置以前、利用者は資料を借りる際に利用証を図書館に預け、返却する際に利用証を返却されていた。現在、利用者は図書館に自由に入出入りできるようになっただけでなく、資料の配置場所もわかるようになったが、広大な敷地を擁する UCAD において図書館間の配送システムはない。また、OPAC に全ての蔵書が登録されているわけではないのでカードケースも設置されていた。しかし、現在はカード目録を使用しているスタッフは 1 名のみで、図書館の生き字引と紹介を受けた。カード目録を使用しているスタッフに話を伺ったところ、この時代の作業は非常に細かく、新聞の中に載っている記事一つ一つにもカード目録を作っており、記事索引も兼ねていた。具体的な内容については聞かなかったが、日本とアフリカに関する記事のカード目録もあるとのことだった。

OPAC 端末は各フロアに設置されているが、インターネットの接続はされていない。システム導入時に無線 LAN を設置したが、最初の一年のみ動いた後は使用出来なくなってしまう。頻繁に起こる停電と発電機の維持の難しさが問題となっている。

5-4. 図書館連携

セネガルにも ILL システムがある他、COBESS という図書館コンソーシアムも存在する。セネガル国内にある約 40 の教育機関が参加しており、主に科学技術分野のオープンアクセス化とデータベースの価格交渉を行っている。

また、DATAD という学位論文データベースがアフリカ大学協会 (AAU) により構築されている。アフリカでは学位論文が研究活動の割合の多くを占めているようで、UCAD 図書館でも論文のデジタル化作業を進めている。現在、UCAD の学位論文は 1,693 フルテキストで公開されている。さらに、セネガル省庁と連携し、RENUM というデジタル化プロジェクトにも携わっている。具体的な内容は不明だが、全国的なネットワークの設立の為に国レベルで動こうとしているようだ。UCAD 図書館として、今後はオンライン資源の最適利用の為に、館種、さらには国を超えて二国間または多国間のパートナーシップを強化していく方向性のようだ。

5-5. Ecole de Bibliothécaires, Archivistes et Documentalistes : EBAD



EBAD 図書室内

中央図書館横には、EBAD (図書館情報学課程) の校舎がある。EBAD は 1967 年に大学の附属機関として始まり、約 300 人の学生が在籍 (2010 年時点) している。EBAD 図書館も校舎内にあるが、中央図書館に隣接している為利用数は一日 20 人程度という。館内を案内してくれた M.Mané も EBAD 出身だが、大学図書館に勤務する為にはバカロレア⁸⁾に合格し、EBAD で勉強しなければならない。管理職になるには、EBAD でドクターまで取る必要がある。ちなみに、

学生の卒業率は EBAD の場合 99%だが、他学部は 30~50%程度だとのことだった。

5-6. フランス文学部図書室

中央図書館から徒歩数分のところにあるフランス文学部図書室も見学させてもらったが、一教室を図書室として使用しているようで 100 m²程度の広さだった。図書室内は薄暗く、書架には埃が積もっており、中央図書館の開放的な雰囲気とは対照的に思えた。

図書室の半分が書架スペースになっており、主に修士論文を所蔵している。しかし、蔵書数等細かいことは把握していないようだ。閲覧スペースと書架の間に仕切りのようなものはないが、資料を借りる場合はカード目録から探しスタッフが取りに行っている。資料

にはナンバリングがされているが、2009年より文学部図書室でも中央図書館同様に請求記号をつけていこうという動きがあるようだ。

6. 終わりに

歴史や文化について調べてみても、私にとっては依然遠い国だったセネガルにおいて、図書館事情を想像することは難しかった。UCADのようなセネガルでも有数の規模を誇る大学でも、ホームページに図書館の項目はあるが見てみると一言も内容が書かれていなかった（帰国後、中央図書館のHPは独立して存在していることを知った）。市の図書館に関しては、あるのかどうかもわからない状態での出発だった。しかし、日本で知識を得られなかった分、先入観なしに図書館事情を調査することが出来たように思う。

サバシー・チャム村とソコン市のように支援で成り立っている図書館では、図書の管理・修理方法の伝達も大事なことが、まずは図書館と利用者を結びつける為に何をすべきか支援団体と活発な意見交換を行う必要性を感じた。

UCAD 図書館においては、中央図書館と学部図書室との環境の差は大きいものの、施設等の規模に驚かされた。セネガルで先進的な図書館の一つではあるが、今後日本語のクラスを作る為に日本文学の図書が必要との話もあり、日本の大学と UCAD 図書館間において出来る支援もあると感じた。

これらの図書館調査を行い感じたことの一つに、人との繋がり大切さがあった。また、ウォロフ語が話せるかどうかで対応が大きく変わるということも感じた。公用語がフランス語であっても、やはりウォロフ語が話せるのとそうでないのは、店に入るにしても、人に何かを聞くにしても全く対応や値段が変わってくる。

また、調査以外にも人々との出会いを通して得られるものも多くあった。イスラム教徒が多く占めるセネガルにおいては、人に分け与える精神を大切にしており、子ども達もそのような精神を持つよう周囲の大人が教育していた。大人は子供が持っているものに対して「ちょうだい」と言い、子どもがそれを分け与えると褒めてあげるといった光景をよく見た。日本の文化と通じるところもあり、会話の中で本音と建前も使われていた。

セネガルでの滞在をふり返ると、このような図書館事情や人びとの暮らしを私 1 人では決して知ることが出来なかったと強く感じる。たとえ知ることが出来たとしても、今回のような距離で人びとの日常に入り込むことは出来なかつただろう。これは、友人がセネガルで多くの人と繋がりを持ち信頼を得てきたからこそ成り立ったものであった。調査の為にコーディネートや通訳をしてくれた友人の永守氏、私の訪問に快く応対してくれたサバシー・チャム村小学校教員 M.Dione、ソコン市図書館勤務 Mme.Camara や UCAD 関係者に感謝したい。

セネガルの図書館事情を一部でも垣間見ることができ、渡航前は支援するという視点で見えていた図書館に対して、連携する道も模索し始めた。本学では、JICA 事業の一環として水質環境改善等のプロジェクトで毎年アフリカ各地から研修者が来ている。例えば、アフ

リカの図書館と協力して研修者に対し事前準備の段階から帰国後まで水質環境改善の為の資料・文献提供のサポートをする等の可能性を今回の経験を活かし考えていければと思う。

以上

7. 参考文献

1. 小田英郎 [ほか] 監修 (2010) 「アフリカを知る事典」 平凡社
2. 外務省セネガル共和国 (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/senegal/data.html> 2011.11.14)
3. 西アフリカ諸部族で、部族や王の系譜などの口述伝承および物語、詩、歌、踊りなどを司る世襲階級の者。
ランダムハウス英和大辞典, ジャパンナレッジ (<http://www.jkn21.com>, 2011.11.15)
4. セネガルの通貨。為替レートは固定制で 655.9CFA フラン=1 ユーロ。
日本円に換算する場合は、おおよそ÷5する。
5. Université Cheikh Anta Diop de Dakar(<http://www.ucad.sn/> 2011.10.22)
6. Bibliotheque Centrale Université Cheikh Anta Diop de Dakar
(<http://www.bu.ucad.sn/cyberpac/default.asp> 2011.11.14)
7. wikipedia “Université Cheikh Anta Diop de Dakar”
(http://en.wikipedia.org/wiki/Cheikh_Anta_Diop_Universit 2011.11.7)
8. フランスの後期中等教育終了を証明する国家試験。合格者に大学入学資格が与えられる。日本国語大辞典, ジャパンナレッジ (<http://www.jkn21.com>, 2011.11.14)